
刹那的な君へ

塩キャラメル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那的な君へ

【Nコード】

N5870H

【作者名】

塩キヤラメル

【あらすじ】

幼馴染で初恋の相手・椿春香を失い、生きることどこか執着を失くしてしまった翔の前に現れたのは、妙にハイテンションな死神・刹那だった。刹那は翔が「死を回避する」ことを阻止しに来たということだが——？椿春香を死に追いやった原因、刹那の思惑と真実。それらを解き明かそうとしたとき、新たな死神が地上に降り立つ。はたして翔は、「死を回避する」ことは出来るのか。「生きる意味」と「死生観」。歪んだ思いがもたらした、過去の悲劇に迫る現代ファンタジー。

第一章 ハイテンション死神女

「だあゝかあゝらあゝ、私は死神なんですよゝ」

「ええいひつつくな気持ち悪い！」

俺は腕に引っ付いてくる黒ローブ少女と突き飛ばす。　すると
そいつは

「ぐすつ……昔はあんなに優しくかったのに……私はあなたをそんな風に育てた覚えはないよ！」

ローブの袖で顔を覆いながら言う。　というか、俺はお前に育てられた覚えはないぞ。

黒ローブを顔が見えないほど目深に被った――体格と声からして少女だろう――は午前二時にいきなり俺の部屋のドアを蹴破って侵入し、こう言い放ったのである。

「私はあなたの魂を回収することになった死神です！　さあさあ泣いて跪いて命乞いしなさい！」

さてこんなことを言われたとき、みなさんはどうするだろうか？
「さあさあ（以下略）」のセリフにキレる？　それはもうやった。
そう言った直後にドロップキックしてやった。

一応黒ローブなんて着てそれっぽいや格好をしているが、まさかハイそうですかと納得するやつもないと思う。　当然、まあ多少の違いがあるだろうが、こんな対応をするんじゃないだろうか。

「何度が過ぎたイタズラしてやがる。　一千万払ったら警察に通報

するのやめてやるから口止め料置いてさっさと帰れ」

「普通こんな対応しないです！ イタズラじゃないんですよ、^{かける}翔君」
「地の文にツッコミ入れるな——って、え？」

——こいつ、何で俺の名前を知ってるんだ？

こいつの言うとおり、俺の名前は^{かける}翔。 吉田翔というのがフルネームだ。

俺がよっぽど間の抜けた顔をしていたのか、死神女はふつと笑ってから、ぺったんこの胸を大いにそらして言った。

なんだろう、こいつに笑われるとすっぱー腹が立つんだが。

「だから言ったでしょう？ 死神だって。 調書に書いてあることなら全部知ってるんだから！ 例えばそう、テストでの最低点数は数学の四点だとか」

「なッ、何故それを！？」

そういうと、死神はフードの下からわずかに覗く口元をふつと歪ませた。

なんだこのハードボイルドな雰囲気の笑いは。

「だから言っただじゃないですか。 私はあなたのすべてを知っています」

さっきと言っていることが微妙に違う気がするが、まあいい。
死神女はどこからか白い紙を取り出して、その内容を読み上げた。

「じゃあ、正式な通達を読みますよ。 —— 『あなた様、吉田翔様は三日後に亡くなります。 ですが、それまでの間に、あなた

様が死を回避するポイントが存在すると予言されました。それを阻止するために死神を派遣します。それではご冥福をお祈りします」――」

読み終わると死神は紙を空中で消し、胸を張って立った。代弁するなら“これで信じたしろ”だ。

信じる要素が全く見当たらないんだが。数学の……あれは、まあ……調べればわかるんだろう、きっと。

何故そこまで調べるか分からないが。現実逃避？んなことしてないぞ。

「……………で？」
「は？」

オレがそう言うのと死神女は意外といった感じで聞き返してきた。

「何で？ 普通、命乞いとかしない？なんでそんな平然としてられるの？私が死神っぽくなくて怖くないから！？」

「全然死神っぽくないんだが。大体、死神とかそんなの信じないし。というか、今のでどう信じると」

ぶっちゃけた話、生きようが死のうがどうでもいいのだ。生きるんだったらそれを精一杯生きるだけだし、死ぬ運命ならそれを受け入れるまでだ。あがいたって何が変わるわけでもないだろうし。

――アイツの所にも行けるしな。

死神女はオレの言葉を聞いた後、数秒間固まっていたが、やがて何故か力なく言った。

「……………翔君の疑り深さ、昔から変わらないなあ」

だから、お前と俺は今会ったばかりだぞ。

「とにかく！ それを阻止するために三日間、あなたを見張らせてもらいます！」

威厳たつぷりに言ったが、俺より二十センチばかり身長が低いのであまり威厳は感じられない。

そこでふと気づいた事を言ってみる。

「なあ、死を回避されるとどうなるんだ？」

「そうですねえ、その時は魂が回収できなくなるわけですから、担当の死神は冥界に帰ります。ですが、死神は人間界に降りて仕事をしているわけですのでその件は解決済み、つまり魂を回収したのと同じ扱いになってしまっわけですね。だから、その人がいざ死んだときに担当の死神がつかないんです」

「ずいぶんテキトーだなオイ」

「まあ、一度割り振られた仕事は完遂するのが死神の誇りとされていますし、当時の担当が死んだときに回収するしかないんですが、大体は……」

「ま、まさか……」

「はい、当時の担当が魂を回収し忘れて魂が永遠にこの世を彷徨います」

「ちゃんとやれよ仕事！ そんなテキトーなシステム変えろよ！」

俺がツッコミしつつ、拳を振り上げ詰め寄ると死神女はすかさずホールドアップ。

よほど俺が怖かったらしく、上ずった声で言った。

「で、でもっ。今までで数例しかないんですよ！ “死を回避

するポイント”が発生したこと自体が数百年ぶりなんです！！ほ、ほら、あまりにも例が少ないと日本の法も改正されないでしょう！？あれと同じですよ！」

死神女があんまりにも焦っているので俺は手を下ろした。それをみてふうつと死神女が安堵のため息をつく。

こいつ、具体的な例を引っ張り出してきやがった。

死神女は俺のベッドの上でぼんぼん跳ね始める。

「ちゃんと話は聞いてやったが、まだ信じたわけじゃないからな」「もう……なら明日のニュースを見てくださいよ。政治家さんが交通事故で亡くなっているはずです。……えーと、午前四時二十三分。車に乗っていたところを信号無視のトラックに突っ込まれ、意識不明の重体。うわっ……相当エグいことになってますね。」
近くの病院に搬送されるも午前五時三分にお亡くなりにな」

またどこから取り出した紙を読み上げた死神は続けた。

「秋月さんは仕事熱心な方なんで、魂は必ず回収してくれますよ」「ちよつと待て。秋月、なんだ？」「秋月ちなみさんです。生前歌手をなさってましたけど、知ってますよね？」

知らないはずがない。秋月ちなみといえば、有名な歌手で四年前に自殺している。

「死神は自殺した人間がなるんですよ。人の死に触れて、自らの過ちに気付くための罰なんです」

死神女は淡々と言う。わざと表情を消したように。ロープの

下から見える口元には、さっきまでの笑みはなかった。

「もしかして、お前も……？」

「さて、説明も終わりましたし、私は一旦引っ込みます。私のことは刹那と呼んで下さい」

急にさっきまでの口調に戻って言う死神女、いや刹那。

刹那は律儀に「お邪魔しましたー」とか言って玄関から出て行った。

それにしても、「刹那」か。懐かしい名前を聞いたものだ。

その名を持つ主人公が出てくる物語を楽しそうに語る少女を思い出して、俺はふっと微笑んだ。

？ 真偽と一目惚れ？

朝になった。

夕べ死神女が蹴り飛ばしたはずのドアは元通りになっている。
それ以外にも、昨日不審者が部屋に突撃したような痕跡はない。

………はっ。 なんだ、夢か。

俺は寝癖が着いた頭をガシガシかきながら思った。

そーだよな、俺はまだ十七歳の青春真っ盛りの男子高校生だ。
そう簡単に死ぬかつーの。

「ははは」

なんだかバカらしくなって笑ってみる。 そうしてゆっくり起き
上がって枕に手をつくとき、
クシヤリ、と紙の感触がした。

「ん？」

そこには、女子の丸文字で何かが書かれていた。

『翔君へ。』

何度起こしても起きないので、先に学校行っちゃいます。
翔君も早く起きないと、遅刻しちゃうよ。』

遅刻とか関係ないのに気にする刹那より』

俺はその手紙を数秒、呆然と見る。

そして、枕元に置いてある目覚まし時計を見る。

どうやら、悪夢は現実のものだったようだ。

午前八時十分。

……………終わったな。

学校までダッシュで走ってギリギリ間に合わなかった。高校に着くまでの信号に全部引っかかるなんてなんかのイヤガラセかコラ。友達で学級委員長の三浦に注意され、担任には鼻で笑われた。対応逆じゃないのか？

刹那が言っていた政治家の事故死のニュース。俺は遅刻しそうでニュースを見るところではなかったが、三浦に聞くと確かにそれは起きていた。三浦も詳細は思い出せないなので携帯で調べてみると、まさに刹那が言った状況そのままだった。

刹那は完璧に予言をしたことになる。

とりあえず、いまのところ刹那の言うことは本当だということにしておく。

刹那はというと、教室の後ろのほうでふよふよ浮いていた。お約束どおり、刹那の姿は俺以外見ることが出来ないようだ。浮くのなんて既に人間業じゃないので、もう完全に信じることにした。時折聞こえる、

「ヒマー」とか、

「お腹すいたー」とか、

「あの先生カツラだー」とか言う声はうっさくて仕方なかったが、注意しようにもできないので華麗に無視することにした。

ヒマヒマ星人と化した死神女が何かやらかすのではないかと内心不安だったが、何事もなく放課後を迎えた。

「吉田」

放課後、帰ろうとする俺に声をかけたのは三浦だった。

「おー、三浦。一緒に帰らねーか？」

「いや、俺はちょっと用事があるから」

「あ、そうか。担任の呼び出しか」

「まあ、そんなもんかな」

三浦は曖昧な笑みを浮かべると、職員室のほうへ歩き去った。オレンジ色に染まった三浦の笑顔は、夕日のせいかどこか寂しげだった。

三浦は、珍しいことになにか言いたそうに口をモゴモゴさせる。俺ははつきりした性格だから、そういうのはあまり気に食わない。だから俺は、聞いた。

「三浦、どうした？」

だが俺は、それを後悔することになる。

ためらいがちに切り出された言葉は、俺の癒えない傷を刺激した。

「なあ、明後日は椿春香の命日だよな」

三浦の目は、いつになく鋭くて。俺は彼女が死んだことを責められているような気がした。

「……………ああ」

そう呟くことが精一杯。心臓は早鐘を打ち、今にも爆発してしまいそうだ。

三浦はそんな俺をまじまじと見た後、

「いや、悪い。吉田には、辛い話題だったよな」

そういった彼はもういつもの彼だった。

「……………翔君」

刹那がためらいがちに、小さく呟く。

「ん？ なんだ」

「あの人、フルネームはなんていうんですか？」

「三浦彰だけど」

そばからそつと尋ねてきた刹那は黙り込む。

「……………もしかして、惚れたか？」

そう聞いてやると小さい拳がアッパーカットを決め、

「翔君のバカ！」

と叫ぶと走り（浮いて？）去ってしまった。

刹那のヤツ、絶対惚れたな。

だけど若干、刹那に救われてしまったのだった。

？ 真偽と一目惚れ？（後書き）

受験を言い訳にして更新停滞をお詫びするの巻

いや、本当に忙しかったんだって。 志望校決めたり志願理由書書

いたりヘタリア見たりテスト受けたりヘタリア見たりニコ動見たり。

あれ？ なんか言い訳になってな（ry

この後作者は親にボコられました

？ 君の慟哭、俺の叫び（前書き）

しょっぱなから謝罪です。 まじごめんなさい。

実は前の話に大事な伏線を入れるのを忘れてしまったのです。

今回の話からその伏線はキーになっているので読み直すことを激しく推奨いたします。

実にすみませんでした。

？ 君の慟哭、俺の叫び

刹那は、『椿春香』のことを何も聞かなかった。

逆に俺は、刹那に椿のことを聞きたくて聞きたくて仕方がなかった。

椿は、刹那の言うことが本当ならば、死神になっているはずだ。

何故なら。

何故なら、椿春香は二年前、学校の屋上から投身自殺していたのだから。

俺と椿は幼馴染で。そして彼女は俺の初恋の女の子で。

幼いときによくあるようなやり取りをよくしていた。

「春香、翔君のお嫁さんになる！」

「うん」

「ずっと、一緒だよ」

小学生までは下の名前で春香と呼んでいたが、さすがに小四になると恥ずかしくなっている日、

「椿」

と呼んだら、彼女は笑顔で「うわ、翔君が照れてる」とからかった。

彼女が嫌いになったわけじゃなかった。

ただ、ちょっと恥かしくて。

中学になるとずっと一緒だというわけにも行かなかった。
彼女と俺の仲は小学生のときほど親密ではなくなったけど、他の
友達なんかよりはずっと近い関係だった。

少なくとも、俺は。

彼女は中学三年の時、屋上から自殺した。

……………なんか寝苦しい。

夜中、そう思って目を開けると、傍らに立っている刹那が俺の顔を覗き込んでいた。

俺はベッドから勢いよく身体を起こす。

「……………！？ 何してやがる！」

そう叫ぶと刹那は、

「翔君、うなされてたから」

と言った。

おかしいことに、いつもみたいな軽いノリはない。 最初に出たとき、死神の話になったときのような、抑揚のない、低い声だった。

どうした、そう聞こうと思ったとき刹那が言った。

「何の夢見てたんですか？」

そう言われて考えてみると、何を見ていたのか思い出せない。
幼い頃の夢だったような……？

うー、とかあーとか唸っていると刹那はことさら低い声で、確かめるように、聞いた。

「春香、さんですね」

俺は啞然とした。

アホみたいに口を開けて呆けている俺と違って、刹那はどこか力強いような雰囲気を出している。

刹那に黒いローブは似合わないと思っていたが、今の刹那の雰囲気は死神にふさわしい、暗くて、どこか恐ろしいものがある。

刹那は話し続ける。

「学校で会った三浦君も話していましたね？ 椿春香さんのことを」

「刹那」

「彼女はこういう理由で死んだの！？ 自殺？ 答えてっ！！」

刹那の口調が荒くなる。今にも俺を押し倒しそうな勢いで、シャツをギリリと握りしめていた。

ほんの一日しか過ごしていないけれど、刹那は普段こんなに口調は荒くないとわかる。

一体、彼女は何故春香のことを知りたがるのか。

一体、どれだけの思いで。

「……刹那」

「お願い、翔君……。 答えて……！！」

刹那の小さな拳が、シャツを握り締めたままぶるぶると震える。

『お願い、答えて』

今にも泣きそうな、悲痛な声。その声が、耳の奥で誰かの声に重なった。

聞きたくて仕方なかったことを聞くチャンスだ。だけど、今こんなに取り乱している刹那に聞けるだろうか。

椿春香は死神になっているのか、などと。

俺は口を開いた。二年間、彼女の話題はなるべく出さなかった。そのせいか、口に出そうと思っていた言葉は思った以上に、重い。

「……………春香は、二年前の中学三年生のとき、投身自殺した。…
…即死だったよ」

それを聞いた途端、刹那は数秒呆けたように立ち尽くした。きつと深く被ったローブのしたでは目を見開いていることだろう。シートを握り締めていた拳が開かれて、しわくちゃになったシートが見える。

刹那はつわごとを言うように言った。

「……………そうだったんだ。だから……………、そうだったんですね」

刹那はしっかりと立って、フードの下から俺をしっかりと見据えた。次に口を開いた刹那はもう、普段どおりの刹那だった。

「すみません、取り乱しました。ねえ翔君、春香さんのこと聞きたくありませんか？」

思いもよらなかった。俺はためらいがちに聞く。

「いいのか？」

「ええ。春香さんは、翔君も思っていたでしょうが死神になっていますよ」

「知ってるのか」

「ええ、……………大親友です」

後半は、ゆつくりと大切そうに呟いた。

「死神で私ほど春香さんのことを知っている人はいないと思いますよ？」

そうなのか、と何故か声に出せなかった。

刹那はベッドに腰掛けた。

「会ったときに、魂の回収のことについて話しましたよね？」

「ああ、でもよくわからなかった」

「じゃあ、詳しくお話しますね」

そういうと、刹那は長い説明を始めた。

毎月はじめに、『死亡予定者リスト』が発表される。それには死亡予定者と、命日、死因、担当の死神が書かれている。

死因が自殺として書いてあるもの。この死亡予定者が死ぬと、死神になる。

しかし、死神の中では死因どころか死亡予定者も適当なのでは、という噂もある。

「どこまで適当なんだよ……………」

「でも、これにはちゃんとした理由があるんですよ？」

世界の構成情報は、数だ。

何人の人間が死ぬか。 何人の人間が死神になるか。 数を違えればそれは世界の秩序を乱すことに繋がるが、数さえ合えばなんでもいいというわけだ。

その規律が守られているか調べる番人でも、いちいち誰が死んだ誰が死ななかったなどと調べるのは億劫だ。 だから、数で決める。

「じゃあ、もしかして春香もお前も適当に死なせられたってことか？」

「かもしれないって話ですよ。 だから、何人かの死神は神様に抗議しようって運動が始まってるらしいですよ」

「ふーん……」

「あ、あんまり興味ないって顔ですね？ もしかしたら現世にも影響あるかもしれないですから覚えといてくださいね」

刹那は念を押す。

「ちゃんと、覚えておいてくださいね！」

「てか、もうすぐ俺死ぬんじゃ」

「その日にならないとわかりませんよ！ 若者は希望を失っちゃいけません！」

刹那の熱血（？）発言を聞き流して、俺はもう一度寝ることにした。

刹那は俺の魂を回収するはずなのに、そんなこと言っていないのか。 だけど、なんだか楽しげな気分になったのだ。

？ 君の慟哭、俺の叫び（後書き）

疲れた。つか今気付いたんだけど私ってキーボード打つとき小指立つねww
というか受験勉強もしないで更新してるって受験生としてどーなんでしょうね？

あーもう、受験まじやばいです。

そろそろパソコン自重しようと思っているのでもしかしたら次の更新が3月くらいかもしれません……。

次の更新が受験前だったら作者は完全に第一志望に落ちますよww
そうならないことを願いつつ、筆を置きます。

？ 向こうの少女

刹那は「今日は校内探検に行つて来まーす」と言い残し、どこかに行っている。正直なにかやらかすのではないかと心配だが、本人は大丈夫と言っていたのでとりあえず信じておく。それより重要な懸案事項は、これだ。

三浦は、昨日からなんかおかしい。いつもは教師の講義を熱心に聴きながらノートをとっているのに、今日は窓の外ばかり見ている。時々、はっとしたようにノートをとり始めるが一分もしないうちにその手は止まる。

昨日、椿のことについて聞いてきたときの様子もおかしかった。三浦がそうなる気持ちも、わからなくはない。むしろ、わかりすぎて辛いほどだ。

あの日のことは俺たちは、特に三浦は今まで口に出さなかった。

俺はふと、黒板に書かれた日付を見る。

今日は五月十七日。

あと一日で、俺たちにとっては悪夢の日になる。

椿春香が、生きていた頃。

俺と三浦、椿はクラスの中でも特に仲が良かった。あの頃の俺は毎日が楽しくて、それは三浦も、もちろん椿もそうだろうと思っていた。

それはどんなに愚かで、浅ましい思いだろう。人がいる数だけ、その人間の思いは異なる。だから、自分の周

りでも恐ろしいことや悲しいことはたくさん起こっている。そんな当たり前のことに、あの頃の俺はまったく気付いていなかった。

二年前のその日は、五月にしては気温が高く、空は青く澄んでいた。

教室の机の中にそつと入れられた、水色のメモ。俺は昼休みの後にそのことを気付いた。

そこに見知った丸文字で、『翔君、いままでありがとう。短い人生だけど、とっても楽しかったよ』と書かれていたのを見て、俺は教室を飛び出した。

クラスの友達が驚く声や、廊下ですれちがった教師など気にも留めなかった。

ただ、一目散に。 椿がいるであろう場所に向かう。
屋上へ。

ドアをあけると、生ぬるい風が俺の汗だくになった頬を撫でる。そして、柵の向こうにこちら側に背を向けた椿が立っていた。

椿、と俺が声を搾り出すと彼女は振り向いた。少しでもバランスを崩したら、校庭にまっさかさまだというのに驚くほど普通に、軽く彼女は振り向く。

「ああ、……翔君」

いつもと全く変わる事のない、無邪気な笑顔。 かけられた声も、いつもとまったく変わらない。

大汗をかいたせいだろうか。 いやに身体が薄ら寒かった。

「お前、何しようとしてんだよ……!!」

「自殺」

柵の向こうに立つ少女は、たったひとことで断じる。 無邪気な笑顔は微塵も動くことはない。

「今にも飛び降りられるところだったのに、邪魔されちゃったところ」

そうして笑顔は変わらないまま、少しだけ目線を下にやる。そこには丁寧に揃えられた上履きと、それを重石にして置かれた封筒が置いてあった。その中身は、おそらく遺書。

そして、もう一度俺のほうを見て話し出した。

「翔君はどうしてここがわかったんだろうね。私はいつも一人で誰にも必要とされてなかったのに。どうしてここがわかったんだろうね……」

俺の表情を見て、ますます笑顔になりながら。でも、その笑顔とは逆に椿の声は冷たく鋭くなっていく。

何故か、薄ら寒さは強くなり、指先はどんどん冷えてくる。

「ねえ、どうして？」

その椿は、間違いなく俺の知らない椿だった。

表情だけは明るく、声は冷たく。先程言っていた言葉も、何もかもまったく理解できない。

知らない。

「どうして、ここに来たの？」

俺は、こんな椿を知らない——！

そんな思いに頭はどんどん支配されていく。椿は柵の向こうにいて、自殺しようとしているのに。自分の混乱だけで、頭がいっぱいになる。

どうして、椿が自殺なんかしようとしているのか。

どうして、そんなときに笑ってなんかいられるのか。

まったく、わからない。知らない。

わからないから、怖い。

そんな俺の感情に気付いたのだろう、椿は目を少しだけ細めた。

「椿……！」

そう呼ぶのが、やっとだった。

なんて言っているのか、わからなかったから。

そのときだった。

中でもひととき強い風が吹いたのは。

椿の細い身体はあっけなく、校庭のほうへ追いやられた。彼女の表情が、はじめて驚いたものになる。俺はもう一度、彼女の名を叫ぶ。

椿は落ちてゆく瞬間に、最期にもう一度だけ笑った。

それはいつもの、俺が知っている椿春香の笑顔だった。

？ 向こうの少女（後書き）

志望校に無事合格しました！

更新の遅くなってしまうって申し訳ありません。

書いてて辛かったのが、椿がどんどん中二病みたいになってゆくこと。

作者の中で椿は死生観がちょっと狂っているイメージの子だったの
で、そうしたかったんですがorz

第二章 嘘と真実、表と裏

放課後、俺は刹那を相手に苦戦していた。

「買ってー、買ってー、買ってー、買ってー！」

「ガキかデメエは!？」

授業も終わり、（三浦はさっさと帰ってしまったが）友達と他愛もない話をし、さー帰るぞと伸びをしたところを刹那に腕を引っ張られ。そして、連れてこられた購買でこの騒ぎである。売れ残った「買って買って」と指差す先には、新作おかし。パッケージには「メロン牛乳味」とある。……企業よ、なぜそんなにモズそんなモノを発売した。

そう少し現実逃避してみるものの、刹那は以前腕をつかみ叫びまくっている。今は購買のおばちゃんがないからいいものの、他人から見たら完全に不審者だ。刹那は姿も声も周りには見えないので、他人からは俺は独り言というか、一人怒鳴りをしているように見えてしまう。

「メ・ロ・ンー！ 牛・乳ー！」

ああもう。

そう思っただけ視線を窓の外に向けたときだった。

「ん？」

西校舎の廊下を三浦が歩いているのを見た。刹那は俺の声に気付いたらしく、騒ぐのを止めて俺と同じほうを見た。

この校舎の中にはを囲むようにして建てられている。今俺がいる購買のある校舎は東校舎の最上階で、三浦がいる校舎は西校舎だ。（あいつ、もう帰ったんじゃないかな？）

そう思っただけと少しみていると、三浦は屋上へと続く階段を登り始めた。

「!？」

俺が声にならない声を上げると同時に、刹那も身を硬くする。

あの時以来、俺も三浦も椿の話はしていない。三浦は俺以上に椿の件に関しては敏感で、屋上にいくことなど、まずない。

「……刹那、それ買うかどうか決めるの、もう少し後にしてくれな
いか」

「……………」

刹那はうなずくと、静かに俺の腕を放す。

「行きましよう、翔君」

そして黒いロープの下から俺の目を見つめて言った。

「でも、絶対に買ってもらいますからね、メロン牛乳のおかし」

第二章 嘘と真実、表と裏（後書き）

今回は短めになってしまいました（汗
でも、区切りが良かったので更新ということで（ry

？　もうひとつの……

椿は小説を書くことが好きだった。　気持ちの赴くままに小説を書き、授業中に危うく教師に見つかりそうになったこともある。

彼女は小説を書くとき、桜色のバインダーを広げ、真っ白なルーズリーフに物語を綴っていた。　小説を俺たちに見せてくれたことはない。　だけど俺は、垣間見える可愛い丸文字や書いているときの優しくて満ち足りた椿の表情を見るのが好きだった。

昼休みの教室でのことだ。　前に一度、どんな物語を書いていたのかと聞いたことがある。　すると椿はくすぐったそうに笑うと、バインダーを優しく抱きしめて言うのだった。

「刹那っていう女の子が主人公なの」

それで？と続けると、「秘密！」と冗談っぽく笑って言った。

春の日差しが教室にキラキラと差し込んでいた。

血色の夕日と三浦の黒い影がくつきりとしたコントラストを描く。

そう——三浦はちょうど、柵を越えて立っていた。　柵の手前には綺麗に揃えられた靴、その下には封筒。　それはまるで、あのときのよう。

初夏の空、風で暴れる彼女の髪。

あのときの彼女の言葉は、笑顔は、何を意味していたのだろうか。俺の見ていた椿は、いつも幸せそうだったのに。

どうして彼女はあの日、屋上から飛び降りたのだろう。

教えて欲しい、椿。

階段を駆け上がったせいか、息が異常に乱れている。　こみ上げる吐き気と激情を抑えながら、俺は叫ぶ。

「――三浦ッ！」

三浦はゆっくりと振り向いた。三浦の驚くほど冷たく、俺を侮蔑したような表情に思わず息を吞んでしまう。それでも何故か――椿の表情と重なってしまふ。息はまだ乱れたままだ。それどころか、どんどん息継ぎが困難になっていく気がする。

「……何で来たんだよ」三浦は低い声で言った。

知らない。こんな三浦を、俺は知らない。

無意識に心の中で呟いた言葉があのと時の言葉と同じだと気付いたとき、俺はもう限界だった。

「翔君ッ！」

視界が暗転して、次に瞼を開けたときにはコンクリートの地面が目の前にあった。呼吸ができなくなってきた、次には吐きそうになってくる。刹那はずくまっている俺の名前を呼び続け、背中をさすっている。俺は目をつぶった。

椿が少し驚いた顔で、屋上から落ちていく。そんな椿を俺はただ、何も出来ずに見ているだけ。

そんな絶望的な光景を、俺はもう一度見なければならぬのか。

「このバカ！　しっかりしてください！」刹那の泣いているような怒っているような声が飛ぶ。

ダメだ、ダメなんだ刹那。吐き気を抑えているといつの間にか熱い涙が頬を伝っているのを感じた。刹那の小さな拳が、うずくまった俺の背中をドカドカ殴る。

「俺はもう……あんな光景を二度と……ッ、二度と見たくないんだ……ッ！」

抑えきれない思いを口にした瞬間、刹那が身を硬くしたのがわかった。俺は目を開ける。熱い涙で視界がぐちゃぐちゃだった。

「そうやってお前は、椿から逃げたのか」

三浦の刃のような言葉が、俺の胸をえぐる。ほんの少しだけ顔を上げると、三浦が眉根をきつく寄せてみていた。眼鏡の奥から軽蔑したような視線が俺を貫く。

「どうせお前には、椿がどうして死んだのかわからないだろう。そうやって生きている椿からも、死んでいる椿からも逃げて。

椿の痛みを理解しようともせず、ただ自分の中で美化して、椿を苦しめてたんだ」

何言ってるんだよ、と言おうとしたがただひゅうひゅうと音がしてくるだけだった。そんな俺を、血色の夕日を背にして立つ三浦は鼻で笑って続けた。

「俺は知ってたよ、椿がどうして苦しんでいたのか」

「何をわかってるんですか」

低い声で呟いたのは、隣にいた刹那だった。驚いて刹那を見ると、ロープの下から覗く唇をきつく噛んでいた。更に驚いたことに、刹那が見えないはずの三浦も驚いた顔をして見つめていた。

「何をわかってるんですか」

驚く三浦にもう一度問いかける刹那。その小さな身体からは異常な迫力が出ていた。

俺はこんな空気を持つ刹那を一度だけ見たことがある。あの日俺に椿について聞いたときの、異常に取り乱した刹那だ。

刹那は俺の背中をそつと撫でた後、すつくと立ち上がる。

「翔君の痛みを理解することもできないあなたに、どうして春香さんの痛みがわかるんですか」

刹那はそう言い放つと、滑らかに前へと動いた。まるで見せ付けるような、人間では決してできない動きに三浦は固まる。

刹那は死神だ。例えその姿がいくら人間の少女のものでも、いくらその身体に足が付いていようと、刹那は決して人間ではない人間でいることを許されない。

俺はみじろぎもせず、刹那の小さな背中を見つめていた。

「あなたは何も知らないし、わからない。それは翔君と同じです。それはあなたたちは残された側だから」

その動きの異様さにか、それとも刹那の迫力に気圧されたのか三浦は一步、後ろへ下がる。

刹那は変わらず話し続け、滑るように前へ動く。

「これからも同じです。あなたは残された側で、決して誰かを残すことはできない」

三浦や俺のような、誰かを残して死んでしまった刹那。死神になつて人の死に触れ、残された人間を見てきた死神の刹那。刹那は両方の苦しみを知っている。

いつのまにか日は落ち、あたりは暗闇に支配されていた。

「私は自殺に対して何も言うことはできません。でもあなたがしようとしているソレは、絶対に間違っている」

死神は自殺した人間になる。人の死に触れて、自らの過ちに気付くための罰。その罰を受けてきた死神女は、三浦がいる柵の向こうまであと数メートルになったとき、はっきりと告げた。

「あなたは死ぬべき人間ではありません」

三浦の身体が崩れ落ちる。しかし下手にバランスを崩したら校庭へまっさかさまの場所だ。俺が声を発する前に、刹那が動いた。神速というべき速さだった。

いつのまにか柵を越え、三浦を片手で抱きかかえていた。俺は大きく安堵の溜息をつくと共に、刹那の怪力さを笑った。

（そういえばあいつ、最初に会ったときも俺の部屋のドア蹴破つてたよな……）

どうでもいいことに笑った後、意識が薄れていくことに気付いた。でも、意識を失う直前に振り向いた刹那は。

確かにローブの下から大粒の涙を流していた。

？ もうひとつの……（後書き）

長らくお待たせしてしまって申し訳ありません。

今回はかなりキツかったです。　そこで分量もいつもより多いです。

？ 謎かけ、答えは

目覚めると屋上の柵と、その先に広がる夜の町並みがあった。

俺はあの時に倒れ、屋上の壁に寄りかかるようにして眠っていたらしい。連れてきたのは無論、

「……刹那」

俺の手を握っている刹那だった。その小さな手は冷たく、生命の脈動を一切感じなかった。気付いた瞬間、皮膚が粟立った。そんな俺自身に激しい自己嫌悪を感じた。

当たり前だろ、刹那は死神なんだから。そう自分自身に言い聞かせ、掠れた声を出す。

「三浦はどうなったんだ……？」

すると、刹那はフードの下で小さな笑みを作った。

「三浦くんは大丈夫です。あのあと保健室まで連れていきましたから。ご両親がお迎えに来ました」

「そっか、三浦のこと、ありがとうな」

そう言つと刹那はふうつと溜め息をついて、何も答えなかった。しばらく、二人で星空を見続ける。

何分たっただろうか。しばらくして刹那は口を開く。

「……ただ、ふざけんなって言いたかっただけです」

口元まである深いフードからは何の表情も読み取れない。

「……なあ俺、本当に死ぬのか？」

俺の問いかけに、こくと頷く。ややあつて、「死を回避できなければ」と言った。

黙り込んだ俺に今度は刹那が尋ねた。

恐らく、フードの奥からじつと俺の目を見つめて。

「あなたは今、死にたいですか？」

私は死神。死神になったその日から、私の名は刹那になった。
あの時の恐怖を、忘れないように。

あの時に実感したものを忘れないように。

私の問いに翔君は「死にたくない、と思う」と答えた。

「じゃあ、生きたいですか？」そう聞くと数秒の間があつて「わからない」と答えた。

私は何も言わず、何もしなかった。

生きることを捨てた愚かな私に言えることはない。

それでも聞きたかった。

理由もわからず、ただ。ただ彼の想いを、知りたかった。

その日の深夜。

私は古いビルの屋上に、縮こまって座っていた。翔君の家は見

えない。

もっとも、こんな小細工は気休めぐらいにしかないが。と

いうか、気休めにもなっていない。

だって、死亡予定者名簿に翔君について載ってるし。

だけど——来てくれる。

私の大好きな死神の先輩は、一度私のもとへ来る。

そんなずがるような予想を胸に、ここで待っていた。

コツ、と硬質な音が、私の背後から聞こえた。

私は立ち上がり、後ろにいる死神に向き直る。

私と同じ、風にはためく、漆黒のロープ。ただ違うのは、ロー

プと共にチャリチャリと音をたてる、無数に着けられたシルバーチ
ェーン。

深く被ったロープ。そこから僅かに見える顔は傷だらけ。

来てくれたのだ——秋月ちなみ先輩が。

？ 死神の目的

「いつまであの人間を生かしておくのよ、アンタ」

開口一言、秋月さんは低い、ドスの聞いた声で言った。青白く

輝く月を背にして立つ秋月さんは、私なんかよりずっと死神らしい。

死神らしく……暗く、禍々しい。

「まだ吉田翔の命日は、来ていませんよ」

「何言ってるんのアンタ」

私の一言に秋月さんはニイ、と口を歪めて笑う。口元に走る傷

が、笑った口を共に歪む。

「“魂の回収に関する特例、第十三条——『死を回避する』可能性がある死亡予定者の魂は、死亡予定日を待たずして、担当した死神によつて回収すること”。こういう規則あつたの、覚えてる？」

『死を回避する』ポイントがあるのはほとんどの場合は命日当日だからねえ、そういう可能性は摘み取っておかなくちゃ」

秋月さんの言っていることは正解だ。だけど——、けどそんなこと、私には出来ない。

最初は何故だかわからなかった。翔君を守りたい、守らなければ。そんな思いばかりがあつて、『どうして』なのかわからなかった。けれど、今はわかる。詳しいことは思い出せないけれど、私は翔君に救われたのだ。だから守りたいんだと思う。

きつと、この気持ちは秋月さんには理解できないだろう。それは秋月さんがどうこうという問題ではない。私と秋月さんは、根本的に違うのだ。

秋月さんは子供を宥めるような、しかし暗い声で続ける。

「あと数時間で命日当日だけど、まだ狩らないワケ？ いい加減にしないよ」

最後のこの言葉だけは、明確に怒りを含んで。殺風景なビルの屋上を冷たい風が吹き抜けていく。

風がローブの裾を僅かにはためかせたときに寒気が走った。けどこれはきつと風のせいなんかじゃない。人間の頃なら冷や汗を流していたらどうか、と私は黒いローブの奥で自嘲気味に笑った。

私のその笑みをみて、秋月さんは理解したらしい。

「へえ……あの子か。いつもは私が怒るとシヨボーンとしてるくせに、笑えるなんてね。アンタの言い分はわかった。けどさあ」

次の瞬間、私と秋月さんの立つ間の空気が、一瞬にして凍ったのがわかった。思わず後退りしそうになるが、懸命にこらえる。

「私は、アンタのセンパイの、死神なんだよ？」

なんて気迫だ。さすが、僅か四年で下っ端から管理職にまでのしあがった秋月さんだ。秋月さんは、この死神という仕事を自らに最もふさわしいと考えている。生前、多くの人を共感させた歌手という仕事なんかよりも。それは本人の口から聞かなくても、普段の秋月さんを見ていれば容易に気付くことができる。だからきつと、今の私の怠慢が許せない。その私を怒るためと、私に代わって翔君の魂を回収するために、必ずここに来ると思っていた。

そしてその予想は当たった。

私が秋月さんに堂々と自分の思いを伝えるための、予想は。

「翔君は、死なせません」

そういうと、秋月さんはぎゅっと口を引き結んだ。視線を下にやると、黒いローブに映える、真っ白な拳がぶるぶると震えていた。手塩にかけて育てた後輩が、死神としての規律を破ろうとしているのだ。怒るのも無理はない。正直、秋月さんにはあまり楯突きたくない。立場上の問題もあるし、何より秋月さんは私をとても可愛がってくれた。

私がそう思っていると、秋月さんは重い口を開いた。

「……そう」

視線を上げると、うつむいた秋月さんがいた。震える腕を、僅かに持ち上げる。

「なら私は、なんとしてでも魂を回収する」

そういつた瞬間、持ち上げた腕にソレはあった。

月光に鈍く光る、銀色の大きな刃。黒く塗りつぶされた長い持

ち手。

デスサイズ
死神の鎌が、秋月さんの手にあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5870h/>

刹那的な君へ

2010年11月23日11時10分発行